

## ピョートル一世の軍事改革

P. A. クロートフ  
豊川 浩一 訳・解説

### 要旨

本稿は、ピョートル大帝の軍事改革の意義を多角的に捉えようとするものである。ピョートルの治世期、ロシアは軍事面での成功から帝国建設へと向かうことが可能になった。陸軍と海軍の建設がその礎子の役割を果たした。しかし、ピョートルが即位した当時のロシアは経済的に豊かではなく、国家の近代化のために様々な努力がなされなければならなかった。特に軍事改革に向けて新たな方策がとられたのである。

その際、従来ロシアの後進性として指摘されてきた私的所有権の未発達、ならびに農奴制の存在が大いに役立つことになった。前者はロシアに存在した莫大な天然資源の開発を促し、後者は人的資源の確保の上で重要なものとなったのである。

ピョートルによって改革された軍隊はスウェーデンとの北方戦争によって試されることになった。同時代の人々はその成功を、陸軍ではなく、海軍艦隊の活躍、およびそれに基づくサンクト・ペテルブルクの発展に見ている。この海軍艦隊の創設に当たっては、それが十分に計画され、ロシアの外交政策の展開と完全に合致するものであった。この成功により、ロシアはヨーロッパ最大規模の海軍力を備えた強国になった。

キーワード：ピョートル大帝、陸軍、海軍、艦隊、北方戦争

## はじめに

ピョートル一世〔在位 1682～1725 年。以下、鍵括弧は訳者の補註〕は、幼年・青年時代から軍事が国家事業のなかで最重要課題であるとの考えを身につけていた。偉大な国家すなわち帝国を建設しようとする歩みは、国家建設の上で彼の崇拜の対象であるマケドニアのアレクサンドロス大王とユリウス・カエサルに範をとって陸軍と軍事遠征の準備をすることから始まったのである。

まさに軍事面での成功からピョートル一世のロシア帝国建設への動きも開始された。軍隊の近代化である職業的かつ常備的な陸軍と海軍の創設はある種梃子のようなものとなった。この梃子の力を借りて、ロシアでは先進的な産業、つまり様々な分野における重要で高度な生産技術事業が創設され、軍事教育機関が開設され、学術研究が刺激を受けることになった。職業的な陸軍と海軍は莫大な財政的支出を必要とした。この君主により、国内外の商業発展が促され、有用鉱物の調査と採掘に配慮することを余儀なくされ、また貨幣改革の実施をしなければならなかった。結局、職業的な陸軍と海軍の創設はロシアの全国家的なモデルの近代化へ、すなわち後進的なモスクワ国家をヨーロッパ的な国家発展の主要な属性すべてを持つ強大なロシア帝国へと導くことになった。

## 財源確保の問題とその解決

10 歳のピョートルが 1682 年に経済的にはあまり発展していなかったロシアのツァーリの座についたとき、最高権力の管理下にある財源は乏しいものだった。この年、国家の出費は 200 万ルーブリに達していた。しかしカール十二世〔在位 1697～1718 年〕率いるスウェーデン軍に対してポルタヴァ近郊での決定的な戦いに勝利した 1709 年には、国家の出費は 320 万ルーブリにのぼっていたのである<sup>(1)</sup>。

比較のために例をあげるとすれば、イギリスの 1702～1713 年におけるスペイン継承戦争に関わる国家支出は平均して毎年 820 万ポンドであった<sup>(2)</sup>。もしこの額を当時の相場である 1 ポンド＝4 ルーブリで換算すると<sup>(3)</sup>、これは 3280 万ルーブリに相当する。従って、1709 年のイギリスの軍事支出だけでロシアの国家予算の全経費の 10 倍に相当していた。債務支払いを考慮すると、当時イギリスは毎年国家予算の 75～85% を軍事費に費やしていた<sup>(4)</sup>。ロシアにおける軍事支出の割合はそれをほんの僅か上回り、1701～08 年には 77～96% を変動していた<sup>(5)</sup>。

ロシアのさほど豊かではない財源は近代化の要となる方面に集中して向けられた。まず何よりも国家の財政的、物質的そして人的資源は、陸軍と海軍のための生産を助ける工業の高度な生産技術分野の創設と発展に向けられたのである。

しかしながら重要なことは別の点にあった。イギリス、フランスおよびオーストリアという

当時のヨーロッパ列強は、  
 にとって十分ではなかつた  
 であったが、1702～1713  
 しており、軍事に必要  
 ツァーリは財政的な  
 用することになった。  
 を促進させる上で  
 ルーブリは安全を使うこ  
 金属を作り、森林を伐  
 ような資源は臣民の  
 必要とした。さらにこ  
 資源を導入することが  
 と、造船用木材のため  
 である。彼から大砲  
 からはリベフク市の  
 ロシアでは軍事の必要  
 ロシアを支配してい  
 用することを可能にした  
 高度生産技術経済を打ち  
 以上の点に成功したこと  
 成することになった。安  
 時代状況のなかでの生産  
 兵衛隊および貴族の表  
 員を擁護するための徴収  
 である。  
 かくして歴史的評価基  
 るという稀有な現象の本  
 をよく考えた上で最も堅  
 固として前進させる上で  
 軍隊の創設と北方  
 ピョートル大帝時代の  
 設することができた。そ

当時のヨーロッパ列強が有していたような軍隊を創設するための財源が、いずれにせよロシアにとって十分ではなかったのである。1700年のネーデルランドは依然としてヨーロッパの列強であったが、1702～14年〔前出の年代とは異なっているが、その年代は国庫支出の期間を示しており、筆者は問題なしとしている〕のスペイン継承戦争の末までにこの立場を喪失した。

ツァーリは封建的なロシア国家の性格として自らの手中にある臣民に対する巨大な権力を使用することになった。主に国家の所有する土地に対する私的所有権の未発達が、ロシアの工業を発達させる上で利益となる巨大な自然の富を苦も無く利用することを可能にした。ピョートル一世は資金を使うことなく莫大な資源を手に入れることができた。すなわち鉱石を製錬して金属を作り、森林を伐採して船を造るなどである。西ヨーロッパの諸国ではかなりの程度そのような資源は臣民の私有財産であった。彼らの君主はそうした資材を得るために莫大な資金を必要とした。さらにこの君主〔ピョートル一世〕は特別な法令によって民衆に新たな国家的な義務を導入することができた。すなわち新しい要塞や道路を建設すること、運河を開鑿すること、造船用木材のための森を手に入れること、金属を製錬するために鉱石を獲得することなどである。鉄から大砲およびその他の製品を製造するために、1701年からはウラルに、1702年からはリベック市のすぐそばに、そして1703年からはオネガ湖の周囲に工場が建設された。ロシアでは軍事の必要から広範囲な工業化が進展したのである。

ロシアを支配していた農奴制システムが行政的手段の適応によって安価な労働力を幅広く利用することを可能にした。その結果、必要の際、そして何よりも軍事行動という状況で便利な高度生産技術経済を打ち立てること、他の国々との関係から切り離された体制で機能すること、以上の点に成功したことがヨーロッパにおけるロシアの大国としての立場の物質的な基盤を形成することになった。資本主義的経済制度の確かな発展がみられる近世ロシアにおいて、その時代状況のなかでの生産関係の農奴制的下部構造、これこそが支出を最小限に抑える方法—新兵徴募および貴族の義務的勤務という方法—であり、時代の要求に適合した軍隊の職業的な人員を揃えるための前提条件となった。改革者であるツァーリはこの可能性を十全に利用したのである。

かくして歴史的評価基準に従って、ロシアを第一級のヨーロッパの軍事大国に意図的に変えるという稀有な現象の本質的な側面は、ロシアが所有していた財政的、物質的および人的資源をよく考えた上で最も深淵な方法で利用することであった。この目的を首尾一貫して、また確固として前進させる上で主要な歴史的功績は、もちろんピョートル大帝に帰すものである。

### 軍隊の創設と北方戦争

ピョートル大帝時代のロシアは財政面では豊かではなかったものの、強力な職業的軍隊を創設することができた。それは軍事力という観点からすると、他のヨーロッパ列強に匹敵するも

のであった。1709年のポルタヴァ近郊でのスウェーデンに対する勝利の後、ヨーロッパにおけるロシアの新たな意義が明らかになった。1710年2月5日（新暦16日）、イギリス特命大使チャールズ・ウィトワースは、モスクワのクレムリンでの祝典で、ピョートル1世にイギリス女王アン一世〔在位1707～14年〕の書簡を手渡した。その中では、ピョートル一世を皇帝と呼び、ロシアは帝国と称されたのである。1717年のフランスおよびプロイセンとのアムステルダム条約で、ロシアはその歴史上はじめてヨーロッパの最重要な国際条約における保証人という役割を法的に確立した。これは、筆者の見解によると、列強としてのロシアの新たな地位の法的な仕上げを意味するものであった<sup>(6)</sup>。

スウェーデンとの戦争の前夜、ピョートル一世は職業的な軍隊を創設する道へ思い切った一歩を踏み出した。1699年11月16日〔新暦27日〕、彼は一般民衆から軍隊に新兵を強制的に徴集する布告を発した。V. A. チーホノフの最新の研究に従うと、これは一生涯兵役に徴募される最初のいわゆる新兵徴集についての布告であった。陸軍および海軍に徴集された新兵は兵士あるいは水兵となり、新たな兵士身分を形成した。この時以降、彼らは農奴制から解放され、年11ループリという俸給を初めて受け取ったのである。こうした人々は、勤務で上昇するための、すなわち士官の官位を得る可能性という将来への見通しを持つことになった。加えて、彼らは獲得した自由に感謝すべく熱心に勤務したのである。通常、ロシア全土にわたる新兵徴集は年1回行われた<sup>(7)</sup>。

ピョートル一世は新兵徴集によって大規模な職業的な軍隊を創設することができた。1709年のポルタヴァの戦いに関する筆者の最新の研究では、これには8万人のロシア陸軍が参加した。ポルタヴァ近郊のロシア軍は282門の大砲を装備していた。この決定的な戦いで、他方でスウェーデンのカール十二世は実戦部隊2万6650人と大砲41門を備えた軍隊を指揮していた<sup>(8)</sup>。ロシア軍の優勢は明らかであった。

1709年6月27日の〔ポルタヴァ近郊の〕戦闘で、スウェーデン陸軍は完膚なきまでに粉砕された。3日後、スウェーデンの残存部隊はドニエプル河岸で抵抗することなく降伏した。カール十二世自身はトルコへ逃れ、1714年11月になってその地からスウェーデンへ帰還した。18世紀ヨーロッパの歴史上、君主同士が相戦う大きな戦闘で、対戦した軍隊の一方が完全に消滅した、すなわち全員が捕虜となった例はこれ以外にはない。ロシア軍の損害は比較的軽く、戦死者1600名、負傷者3000名であった<sup>(9)</sup>。

ピョートル一世時代、ヨーロッパ諸国では、支出の基本的な部分は軍事費であった。それゆえヨーロッパの主要国の軍事力を比較すると、どのような国家が当時最強の経済と財政、および最も多くの人的資源を持っていたかが一目瞭然である。1711年の正規の兵力は基本的にはロシア陸軍の既存の人員を堅持している。すなわち17万1千人の職業的な軍隊を保持すると決められていた<sup>(10)</sup>。加えて非常備軍を持っていた。すなわちカザーク、タタール人、バシキ-

ル人であった。比較のために、列強の一つで1710年には最も大きな軍隊を有していたフランスは35万人を数えていた<sup>(11)</sup>。イギリス軍は同じ年に24万4千人であった。そのうち13万9千人はイギリス人からなる軍隊であり、10万5千人は傭兵である<sup>(12)</sup>。当時のオランダは13万人の傭兵を保有することができた。第2列目の列強は、外国の援助で集められた軍隊を考慮しても、質的にはまだ脆弱な軍隊しか保持していなかった。すなわちスペインは3万人<sup>(13)</sup>、プロイセンは4万4千人であった<sup>(14)</sup>。

かくしてピョートル一世は、歴史的に最短の期間で、職業的な軍隊を創設し、戦場で強力なスウェーデン軍を凌ぐために、ロシア国家の資源を投入することを敢えてやってのけたのである。

### 海軍創設と「バルト海問題」の解決

しかしながら、同時代の人々はピョートル大帝の最大の功績を職業的な陸軍の創設ではなく、このときまでロシアにはなかった模範的な海軍の創設と見做した。

ロシア海軍創設の基本には目的となる課題の設定があった。そのためロシア海軍は当初から混乱もなく計画通りに建設された。艦隊の出現と発展は君主の気まぐれ、気晴らし、あるいは何かそれに似たようなものでもなく、完全にロシア国家の外交政策の課題と合致したものである。明らかに次のような発言はピョートル一世の今では現存しない布告の一つに源を有している。「(前略)陛下は(中略)福利のためにお考えくださった。そのような陛下のロシア国家は海軍なしには始まらないのである。それゆえロシア海軍の増強のために全力を尽くしてくださいのだ」と。1698年4月までに、アゾフ海および黒海への遠征のため、この専制君主はまず初めに66隻の軍艦の建造を考えた。すなわち60門の大砲を備えた軍艦9隻、50門の大砲を備えた軍艦8隻、48門の大砲を備えた軍艦12隻、42門の大砲を備えた軍艦5隻、34門の大砲を備えた軍艦19隻、26門の大砲および24門の大砲を備えた軍艦1隻ずつ(総計2422門の火砲)、要塞砲撃用帆船7隻、敵艦を焼くための火船4隻である<sup>(15)</sup>！これは大規模な軍艦建造計画であった。その計画の成功が間もなくロシアをヨーロッパ最大規模の海軍力を備えた強国の一つへと押し上げるに違いなかった。艦船の数とその勢力の上ではかなり控えめであったものの、建設された艦隊による1699年のドン川に沿ってアゾフ海へと向かう遠征は、ロシアには未だかつて存在していなかった海軍力の示威行動であった。この海軍遠征の成功は他のヨーロッパに対する公の宣言に等しかった。すなわち海軍強国としてのロシアの誕生である。

しかしピョートル一世はアゾフ海にしっかりと根を下ろすことには失敗した。タガンロークの港を含むアゾフ海への領土上の出口獲得は、1712年初頭の対トルコ戦争の過程で絶望的となった。

いずれにせよ、1700～21年の大北方戦争の過程で、ロシアは近代化を促進するため、また西ヨーロッパと揺るぎない関係を樹立するために完全に十分なほど「バルト海問題」を解決す

ることに成功したのである。以前、南方で行ったように（1695年）、海への出口をまだ持ってはいなかったものの、ピョートル一世はバルト海に海軍を建設し始めた。1703年2～3月、ロシアのバルト海艦隊の最初の建造計画が実行に移された。その建造計画に従うと、フリゲート艦12隻、ガレー船およびそれより小型の船10隻を建造することになっていた<sup>(16)</sup>。1703年の艦隊建造計画は、1703年5月16日（新暦27日）に創基されたサンクト・ペテルブルクを海側から防衛することが期待された。新しい都市へ至る艦隊航路の防衛のために、1704年2～3月にコトリン島から南の海上にクロンシュロット堡壘〔クロンシュタットの7つの堡壘のうちの一つで最初に造られた堡壘〕が建設された。このオランダ風の名前は、コトリン島の大砲を備えたこの小さな要塞が、将来の首都へ海上から襲来する敵艦隊にとってツァーリの銃としての役割を果たすことを象徴していた。1707年の夏までに、艦隊建造計画は実行された。建造されはしたものの大きくはない艦隊は彼らの前にあった課題を克服していった。1704年と1705年、スウェーデン艦隊はクロンシュロットとコトリン〔島〕から撃退され、サンクト・ペテルブルクに達することはできず、その結果、翌年にはロシアが得た海への出口の封鎖にその目的を変更せざるを得なかった。

### ロシア艦隊出現の衝撃

バルト海の東の端に小さなロシアの艦隊が出現したことは、ただちにヨーロッパ諸国の不安の念を呼び起こした。プロイセン国王フリードリヒ一世〔プロイセン王、在位1701～13年〕の1704年1月15日付の突然の覚書は明らかにピョートル一世を驚かせた。その中で、このプロイセン君主は次のような希望を表明した。サンクト・ペテルブルク、要塞および港を創基した後、ツァーリは、「その海軍力を通して他の地域にとって何らかの脅威となることなく」、もっぱら「栄光のみ」を享受し、そして海上交易の発展を考慮してもらいたい、と<sup>(17)</sup>。ロシアの君主はその怒りをやっとのことで押し隠した。彼の意見では、脆弱なプロイセンはロシアと同様のことをなすことはできないに違いなかった。ツァーリは、「世のなかのもしもの場合に備えた港の安全」のために、護衛艦および巡洋艦を保有することを望んでいるだけである、とそつなく答えたのである<sup>(18)</sup>。

1705年2月、ドレスデン駐在のロシア外交官ヨーハン・ラインホルト・フォン・パトクリは次のように報告している。〔神聖ローマ帝国〕皇帝レオポルド1世〔在位1658～1705年〕および彼の反フランス同盟の同盟者たちにとって、ロシアがバルト海に艦隊を創設し始めることは好ましいことではない<sup>(19)</sup>、と。

1706年、モスクワ駐在のイギリス大使チャールズ・ウィトワースは先見の明でもってこれを拒否すべきではないと述べている。「ツァーリは、けっして艦隊をバルト海で展開させないことにおいて、陛下（女王アン一世）に好ましい保障を与える用意はあるものの、穏やかに陸

地の領有を始めるときには、その言葉を破る誘惑は彼にとっては大変大きなものとなるでありましよう」<sup>(20)</sup>、と。

ファリーの意志は確固たるものであった。自らの利益について懸念するヨーロッパの他の国々の不安に対して、ツァーリは自らの目的一すなわちロシアを強力な海軍の強国にするという目的一に向かって首尾一貫して前進することを拒否する気持ちはなかったのである。

### スウェーデンとの最終的決戦とその勝利

1707年末、岸から遠く離れた海でスウェーデンと戦うことができる主力バルト海艦隊の集中的な建設へと舵が切られた。バルト海でのロシア艦隊はロシアにとって必要欠くべからざるものであり、スウェーデンとの戦争を成功裏に終わらせる上で重要な要素であった。それゆえファリーの指導の下に、27隻の主力艦船を保有する予定の新たなそして第2の艦隊建設計画が作成された。サンクト・ペテルブルクに滞在していたロシアの君主は、この第2の艦隊建設計画の実現に向けた最も大胆な手段をとることになった。それはバルト海の広大な空間で戦闘行為を行なうことを目標としてつくられる強力な主力艦隊の創設という大規模な計画である<sup>(21)</sup>。しかしバルト海にロシアの主力艦隊建設の計画が現実のものとなり始めた当時、スウェーデン軍がモスクワへと進軍し、ヴィスワ川沿岸に陣取っていた。この時期の賢明な人たちにとって、ファリーの決定はばかげた行為の極みであり、国家にとって危険な財政資金の引き出しであることに違いなかった。しかし、周知のごとく、「天才は逆説〔理解し難い事物〕の味方」(A. S. プーシキン)である。ピョートル一世は、歴史的過程の歩みを前進させる多くの歩みの一歩だと判断する偉大な統治者であった。この時すでに、彼はスウェーデン本国に対するロシア艦隊の来るべき行動について考えていた。その行動は続いてモスクワへ向かったスウェーデン軍の主力を撃滅することになった。すでに述べたように、スウェーデン軍はボルタヴァ近郊で敗北を喫し(1709年)、捕虜になったのである。

1710年、バルト海に最初のロシア主力艦隊が現れた<sup>(22)</sup>。1713年以降、ロシア艦隊はスウェーデンと岸から遠く離れた海で戦闘に入った。1710～24年までの間に、ロシアは全部でバルト海艦隊に34隻の主力艦、外国への注文による5隻、外国で捕獲した13隻を保有していた。

海岸近くの軍事行動が成功するためにはガレー船艦隊の意義もまた大きかった。ピョートル一世はバルト海における軍事行動にとってガレー船の便利さを評価したバルト海地域における最初の専制君主であった。ピョートル大帝以前、スウェーデンでも、またデンマークでも、それほどまでに大きなガレー船艦隊が建造されたことはなかった。ガレー船の建造は急ぎ足で進められた。すでに1704年には約100隻のそうしたタイプの船が数えられた。1714年のハンウー半島沖および1720年のグレンナム島〔バルト海アランド諸島の南部に位置する〕沖海戦での有名な勝利はまさにガレー船艦隊によって得られたものである。

1718年の戦闘は、ロシアの艦隊がバルト海諸国の艦隊のなかで最強であることを示した。すなわちバルト海で、25隻のロシア艦隊は1436門の大砲および9200人の乗組員を持つに至った<sup>(23)</sup>。スウェーデン艦隊はカールスルーネ〔スウェーデン南部にある軍港〕で僅かに15隻の主力艦を装備し、加えて2月になってやっと基地近くの海で活動したに過ぎなかった。デンマーク艦隊は1718年5月になって、10隻の主力艦と2隻のフリゲート船がコペンハーゲンから出航した<sup>(24)</sup>。

### ピョートルの艦隊に対する評価と実績

イギリスの歴史家 M. S. アンダーソンが述べる推論に注釈を付すことは困難である。彼は、改革者であるツァーリにとって、「ある明白な考えのもと、艦隊は巨大かつ複雑な玩具で、しかも彼個人の娯楽のために作られ、しかもそのために動かすことができるという以上のものではなかった」<sup>(25)</sup>、と述べている。この見解は伝統的なものであり、ピョートル一世による海軍の改革の成果を批判的に評価する現代ロシアのリベラルな〔ここで意味しているのは、自由主義的な、という意味ではなく、過度に寛容な、という否定的な内容である〕人たちの歴史研究とも合致している。こうした人々は上のような評価をピョートル大帝の死後数年たってすでに述べ始めたのである。この歴史家〔アンダーソン〕の別の結論は、海軍強国としてロシアを形成する際の「対価」に関するものである。彼は「この対価のために使ったエネルギーと資源は、相当程度無益に費やされた」と確信している<sup>(26)</sup>。彼の考察の概要は以下の通りである。ガレー船は1696年のアゾフ占領と1713～14年のフィンランド占領の際には役立った。またそれはロシアにとって有利な講和をスウェーデンに強いた後、1719～20年のスウェーデン本国に大損失をもたらした。バルト海における艦隊そのものは「スウェーデンには極めて僅かの実際上の損失しかもたらさず」、軍事行動の過程で僅かにスウェーデン主力艦船1隻のみを捕獲したにすぎなかった。ピョートルの艦隊—ロシアの列強として地位を築く基礎の一つである—に対する M. S. アンダーソンの総括的な結論は次のようなものである。「彼〔ピョートル〕はいかなる深い民族的な要求にも答えなかったのだから、その創設者の死後、〔艦隊は〕みるみるうちに衰退したのである」<sup>(27)</sup>、と。

他の著者にも影響を及ぼしているこうした M. S. アンダーソンのテーゼに対して次のように答えることが可能であろう。第1に、歴史的経験が示しているように、ロシアにおける海上交易を発展させることは、ロシアが常備軍としての海軍艦隊を創設した後になってやっと可能となったのである。その他の彼のテーゼは歴史の現実を示す事実から切り離された抽象的・思弁的な概要そのものである。第2に、ロシア海軍の艦隊が18世紀ロシアのバルト海、アゾフ海および黒海でのすべての戦争で求められ、重要な役割を果たした、ということについては反論することができない。ロシア海軍艦隊はピョートル大帝の死後、僅かの期間、衰退し、また高



強と衰退の時期を経験した。しかし艦隊は必要であったのであり、それゆえそれは常に復興したのである。

ピョートルのロシアは、財政的・物質的資源があるかどうかという観点からすれば、最も先進的なヨーロッパ的水準に対応する強力な海軍艦隊を創設し扶養することができたのである。ピョートル大帝時代のロシア海軍は、一世代の記憶に残る程度の僅かな期間で、またロシアの国内の財政的資源のみで創設された。

ピョートルの海軍艦船の財政的・物質的基礎についての問題は、ロシアが主要なヨーロッパの海軍列強の一つに急激に変化する現象を理解するための鍵である。この点について、様々な見解が述べられてきている。そうしたなか、N. N. ペトルヒンツェフは次のような結論に達した。「物質的にもまた財政的にも比較的乏しいロシアの能力が、戦闘行動に指針を与える強大な海軍を巨大な陸軍と同時に所有させはしなかった」<sup>(28)</sup>、と言う。

ピョートル大帝の現実の行動、すなわち彼の判断が示しているのは、このロシア君主の行動は、「戦闘行動に指針を与える強大な海軍」がロシアには必要である、という〔アンダーソンの考えとは〕決定的に対立する考え方に従ってなされたということである。1713～21年まで、ロシア艦隊は対スウェーデンに対する軍事行動で主要な役割を果たした。他方、陸軍は補助的な役割を果たしたに過ぎなかった。これはロシアの近世史・近代史における唯一の例である。1719年、大尉ナウマ・セニャヴィン率いるロシア艦隊は8時間におよぶ戦闘で3隻のスウェーデン艦船を捕獲した。1721年、すなわち大北方戦争の最後の年、ロシアは海上での軍事行動のために28隻の主力艦（1866門の大砲）からなる艦隊を移動させた。スウェーデンは、老朽化した艦船の修繕を行う資金の不足、および訓練された水兵と艦船用資材の不足のため、海上に僅かに11隻の主力艦（752門の大砲を装備）しか派遣できなかった<sup>(29)</sup>。以後、主力艦船とガレー船から成るロシア艦隊はバルト海地域の国々のなかで最強の艦隊となったのである。サンクト・ペテルブルク駐在イギリス外交官ジェームス・ジェフリスは1719年に祖国に次のような報告をしている。「(前略) 艦船がここで建造されましたが、それはヨーロッパのどこよりも良いものでした」<sup>(30)</sup>、と。1721年8月5日（新暦16日）、124隻のガレー船から成る恐るべきロシア艦隊がヘルシングフォルス〔現ヘルシンキ〕からアランド島に向けて移動した。K. G. ショールブラダ副提督率いるスウェーデン艦隊に対して勝利をおさめたガレー船を指揮したのはM. M. ゴリーツィン将軍であった（1720年7月27日（新暦8月7日）に4隻のフリゲート艦が捕獲された）。1721年8月19日（30日）、艦隊は前年の勝利した場所の近くに停留していたが、M. M. ゴリーツィンに対して、当時、講和条約締結を行っていたロシアの外交官から沿岸にいるスウェーデン人に関する知らせが届いた。スウェーデン人に対して軍事行動に移すように命令が下ったのである。これと並行して講話会議がニスタット市（フィンランド）で行われていた<sup>(31)</sup>。スウェーデン沿岸へロシアのガレー船が新たに接近するという脅威は次の

ような効果をもたらした。すなわち1721年8月30日（新暦9月11日）、スウェーデンは大北方戦争を終結させる講和条約に直ちに署名することになったのである。スウェーデンはロシアにバルト海への広い出口であるリガからヴィボルグまでの沿岸を譲り渡した。そのような成果の達成には、1713～21年の時期における艦船もガレー船もそうであるが、海軍の艦隊の役割が決定的であった。

また次の点も強調すべきである。ピョートル一世は国家の海洋政策を当時知られていた海洋の隅々にまで及ぼそうとした。1716～17年、カスピ海および中央アジアのヒヴァ・ハン国でA. B. チェルカスキー公の軍事遠征隊が活動した。彼の目的はインドへ至る道を調査することであったが、遠征隊の成果は得られなかった。1722年、皇帝自身が指揮するロシアの陸軍と海軍を率いた大規模な遠征がカスピ海でデルベントに至るまで行われた。1722～23年のカスピ海での海洋活動の成果によって、この海の沿岸すべてがロシアの支配下に入った。1723年、ツァーリはインド洋上のマダガスカルへの海軍遠征に向けて、この島をインドへの交易ルートの中間地点との確信から準備した。しかし、遠征はそれが始まってすぐ、レーヴェリ〔現在のタリン〕の近郊で終わった。またピョートル大帝のカビネット〔すなわち政府〕の書類の中に、西インド洋上のトバゴ島購入計画が残されている。計画はサンクト・ペテルブルクとラテン・アメリカの間に直接の交易を発展させることを考えたものであったが（1721年）、それは「そのうちに、その島からロシアは大きな利益を得ることができるかもしれない」という考えがあった<sup>(32)</sup>。1724年12月23日（新暦1725年1月3日）、皇帝ピョートル大帝は海洋遠征の準備に関する布告に署名した。その遠征の課題は、果たしてアジアとアメリカの間に海峡があるかどうか、という問題を明らかにするものであった。これは、遠征する側からしても、その指示書に述べられているように、さらには北氷洋を通して中国、インド、そして日本への道を開拓しようとするために必要であった。

バルト海にロシア海軍艦隊の出現したことが、伝統的な構図に合致してはいない。すなわちまず初めに、漁業の発展、その次に商業の発展、その後、海洋上での国家の利益保護のための海軍力の創設があったという構図である。それとは反対に、ピョートル一世は、ロシアを海軍の列強国に仕上げる過程を軍艦建造から始めたのである。その後、彼は、ロシアの港に外国の商船を引き付けるという目的のはっきりした努力を繰り返し続けた。かくして、ツァーリは軍事・政治的手段によってバルト海の列強国としてロシアを確立するという問題解決を探り始めた。この後になってやっと、ピョートル一世は経済的利益を引き出すことに取りかかった。「ロシアのケース」では、まさに政治的な解決（海軍艦隊の創設）が経済の発展を促したのであって、その反対ではなかったと言えるのである。

しかしサンクト・ペテルブルクがその創基の年（1703年）から海洋交易の港として発展し始めたということは注目しなければならない。とはいえスウェーデン艦隊によるフィンランド

日)、スウェーデンは大北  
る。スウェーデンはロシア  
り渡した。そのような成果  
あるが、海軍の艦隊の役割

策を当時知られていた海洋  
アジアのヒヴァ・ハン国でA.  
ドへ至る道を調査すること  
が指揮するロシアの陸軍と  
られた。1722～23年のカス  
の支配下に入った。1723年、  
島をインドへの交易ルート  
すぐ、レーヴェリ〔現在の  
なわち政府〕の書類の中に、  
、ペテルブルクとラテン・  
とが(1721年)、それは「そ  
しれない」という考えがあっ  
ル大帝は海洋遠征の準備に  
りカの間に海峡があるかど  
側からしても、その指示書  
そして日本への道を開拓し

合致してはいない。すなわち  
での国家の利益保護のための  
ートル一世は、ロシアを海軍  
彼は、ロシアの港に外国の  
かくして、ツァーリは軍事・  
という問題解決を探り始め  
すことに取りかかった。「ロ  
経済の発展を促したのであっ  
ら海洋交易の港として発展し  
デン艦隊によるフィンランド

湾のロシア側沿岸の軍事封鎖は、1713年になってやっと突破されたのである。この年、ロシア主力艦隊は初めてレーヴェリにまで達し、ガレー船はヘルシングフォルスを占領した。この時期まで、サンクト・ペテルブルクには、1703、1704、1710～12年に1隻ずつの外国の商船のみが囲みを破ってやって来ることができたに過ぎないのである。1714年以降、サンクト・ペテルブルクは恒常的な海上港町として発展し始めた。まさに1714年5月8日(新暦19日)、サンクト・ペテルブルクは公式に「統治する都市」として、すなわちロシアの新しい首都として宣言された<sup>(33)</sup>。1715年、スウェーデンの海上封鎖は最終的にロシア艦隊によって解かれた。1715年7～8月、レーヴェリに20隻の主力艦船(大砲1128門)から成るロシア艦隊が集結した<sup>(34)</sup>。1713年以降ロシア艦隊の上首尾な活動の結果、外国の商船がサンクト・ペテルブルクへ来る流れが増大した。1713年、サンクト・ペテルブルク港には7隻の外国の商船が来たが、1714年には16隻、1715年には53隻、1716年には33隻、1717年には51隻、1718年には54隻、1719年は52隻、1720年には75隻、そして1721年には60隻が訪れている。スウェーデンとの戦争終結が海上交易船のサンクト・ペテルブルクへの到来の急激な伸びをもたらした。この港に1722年には120隻の商船、1723年には383隻の商船がやって来たのである！これはピョートル大帝のバルト海政策の真の勝利であった。すでにピョートル大帝の存命中に、サンクト・ペテルブルクはバルト海で最大のロシアの港となった<sup>(35)</sup>。

バルト海にロシア海軍艦隊を出現させるにあたっては、艦隊のための工業基地を建設しなければならなかった。つまり冶金工場、軽工業、木材工業、造船工業の創設である。それらは艦隊に大砲、弾丸、榴弾、錨、様々な艦船用鉄製品などを供給した。帆布とロープ、製材資材の生産が整えられ、造船所が作られた。最大の造船所はペテルブルクにある海軍造船所であった。そこは艦船建造のために必要なすべてを生産するための職工もいた。サンクト・ペテルブルクの子造船所はヨーロッパの企業体のなかで最大級の一つであった。1722年12月、そこで5048人の労働者と職工たちが働いていた<sup>(36)</sup>。

とくに次の点は強調しなければならない。大規模な工業化の結果として、海軍艦隊建設の最も重要な部門は製鉄、製材、帆布、ロープの産業であった。それらの産業は艦隊にとって必要なすべてを生産した。

艦隊にとって、職工や士官たちは必要な人員であった。常備軍としての海軍艦隊の創設および最初期の発展の段階で、ツァーリは外国人水兵を雇うために奔走しなければならなかった。しかしスタッフはロシアの海軍力を構成する信頼できる要員となるためには、彼らの基本がロシア臣民であることが必要であった。この課題を実現するために、1701年、モスクワに君主の布告により数学＝航海術学校が創設された。1715年にはサンクト・ペテルブルクには艦隊の士官を養成するために海軍アカデミーが創設された。また次の点も強調しなければならない。ピョートル大帝は歴史的にははなはだ短期間のうちにしかるべく訓練され海軍勤務経験のある艦

隊のスタッフを組織することに成功したのである。1724年の士官の一覧表によると、第1、2、3等の大尉はすべてロシア人であり、また32名の中尉のうち23名はイギリス艦隊、オランダ艦隊、あるいはデンマーク艦隊の艦船で長期間の研修勤務を積んでいた<sup>(37)</sup>。

## おわりに

さてロシアが強力な海洋国家になるための歴史的課題がピョートル大帝によってどのような代価を支払って解決されたのかという点を検討してみよう。ピョートル大帝の国家機構の改革の歴史について基本的な研究書の著者であるP. N. ミリュコフは、その実現にかかる支出という観点から、それに否定的な評価（艦隊の創設を含めて）を与えた。「国家の政治的成長は…その経済的な発展を規定する。…ロシア国家の破産の対価が、ヨーロッパ的列強の序列に加わることであった」<sup>(38)</sup>。M. S. アンダーソンはP. N. ミリュコフを真似て繰り返しているのである。「いかにロシア人が、あらゆる…制限され副次的な利益に引き付けられても」、それらはロシアの産業、商業、高度な技術、学問、教育の発展と結び合わさってはいるが、ピョートル一世の軍事改革の結果、「それらは、新しい軍事のおよび軍事＝政治的な力を創設した明白かつ甚だ辛い労働を無に帰してしまったのである」<sup>(39)</sup>、と。

しかし大北方戦争の全期間を通じて、外国の公債を借り入れることはなかった。ロシアの国庫には毎年1709年まで使い尽くせないほどの莫大な資金があった。例えば、1704年には280万ルーブリ、1706年には130万ルーブリ、ポルタヴァの会戦に決定的な勝利をおさめた1709年には100万ルーブリであった<sup>(40)</sup>。その結果、艦隊創設のための財政的な資源をロシアは持つことになった。艦隊への予算の支出の割合は著しく、例えば、1704年には12.6パーセント、1707年には11.6パーセント、1709年には8.6パーセント、1720年には11.0パーセント、1724年には12.5パーセントであった<sup>(41)</sup>。

かくして、本質的にピョートル大帝による改革の年を追って増大するロシアの財政的・経済的潜在力は豊かであり、大規模な常備の陸軍と海軍を扶養することが可能であった。アメリカの歴史家E. J. フィリップスの正しい意見によると、ツァーリにして改革者の指導下にある艦隊創設は「技術、行政および財政上の困難さを克服するための、保有する政治的、経済的、社会的そして文化的資源の収集および動員の過程であった」<sup>(42)</sup>、という。

財政的な観点からすると、あるいはロシアに現存した状況および可能性という観点からすると、ロシアを海洋列強国家に変えるというピョートル大帝によってとられた政策は、（現実を無視した）独断の政策ではなかったのである。

北方戦争の時期にバルト海に創設された艦隊は対スウェーデン戦争の最終段階（1713～21年）において重要な役割を果たした。戦争の最後の年には、海洋に保有するロシアの主力艦35隻のうち30隻が展開していた。それらはすべて当時の軍事行動の役に立ったのである<sup>(43)</sup>。

1721年の戦役における艦隊要員は1万5000人以上であった<sup>(44)</sup>。ロシア艦隊はヨーロッパにおいて数の上では、イギリスとフランスに次いで第3位に上った<sup>(45)</sup>。北方戦争を終結させたスウェーデンとのニスタットでの講和条約を記念する版画のために、ピョートル大帝は次のように書いた。「(前略) そうした講和へ向けたこの戦争の終結は他ならぬ艦隊によってもたらされたものである」<sup>(46)</sup>、と。1725年7月、あるイギリスの外交官は次のように記している。「海上の支配はしばしば一つの民族から他の民族へと移った。(中略) 私たちが証人である限り、北に確立した一つの偉大な海洋列強国家をそれと認めることになる」<sup>(47)</sup>、と。

かくして、上で示したように、ピョートル大帝時代の強大な職業的かつ専門的な陸軍および海軍艦隊を保有するロシアの出現は、ロシア国家の経済的な可能性にふさわしく、ロシアがヨーロッパ列強の列に加わることを規定したのである。

(見出しは原文にはなく、訳者が便宜上付けたものである。本文中のキリール文字はラテン文字に置き換えた。日付は旧露暦(ユリウス暦)が先に、現在の西暦=新暦(グレゴリウス暦)が括弧内に記されている。)

注

- (1) Миллюков П.Н. Государственное хозяйство России в первой четверти XVIII столетия и реформа Петра Великого / 2-е изд. СПб., 1905. С. 610-613.
- (2) Brewer, J. *The Sinews of Power: War, Money and the English State, 1688-1783*. Cambridge, Mass., 1990. p. 40.
- (3) Российский государственный архив древних актов (РГАДА). Ф. 9 (Кабинет Петра Великого). Отд. II. Кн. 27. Л. 554.
- (4) Brewer, J. *op. cit.*, p. 40.
- (5) Миллюков П.Н. Государственное хозяйство России в первой четверти XVIII столетия и реформа Петра Великого. С. 120-121, 175, 292-293, 373.
- (6) Кротов П.А. Битва под Полтавой. Начало Великой России. СПб., 2014. С. 531.
- (7) Тихонов В.А. Рекрутская система комплектования русской армии при Петре I. Дисс.... к. и. н. М., 2013. С. 34-46.
- (8) Кротов П.А. Указ. соч. С. 271, 283, 284, 297.
- (9) Там же. С. 420, 421.
- (10) Полное собрание законов Российской империи. СПб., 1830. Т. 4. С. 617.
- (11) Kennedy, P.M. *The Rise and Fall of Great Powers. Economic Change and Military Conflict from 1500 to 2000*. London, 1989. pp. 114, 128.
- (12) Brewer, J. *op. cit.*, p. 42.
- (13) *ibid.*
- (14) Janz, C. *Geschichte der königlich preussischen Armée bis zum Jahre 1807*. Bd. 1. S. 502-503. この軍隊の中には砲兵は含まれていない。
- (15) Лаврентьев А.В. Об одном несохранившемся указе Петра I («Обстоятельная роспись» Азовского флота 1696 г.) // Археографический ежегодник за 1990 год. М., 1992. С. 57, 62.

- (16) *Кротов П.А.* Рождение Балтийского военно-морского флота // Вопросы истории. 1991. № 11. С. 210–211.
- (17) Письма и бумаги императора Петра Великого. СПб., 1893. Т. 3. С. 587–588.
- (18) Там же. С. 30.
- (19) Отдел рукописей Российской национальной библиотеки (Санкт-Петербург). Ф. 550 (Основное собрание рукописной книги). Ф. IV. 865. Л. 157.
- (20) Донесения и другие бумаги чрезвычайного посланника английского при русском дворе Чарльза Витворта с 1704 по 1708 г. // Сб. Императорского русского исторического общества (Сб. РИО). СПб., 1884. Т. 39. С. 224.
- (21) *Кротов П.А.* Создание линейного флота на Балтике при Петре I // Исторические записки. М., 1988. Т. 116. С. 314–316; 2. Рождение Балтийского военно-морского флота. С. 209–210; 3. Судостроительные программы Балтийского флота 1707, 1715 и 1717–1718 годов // История отечественного судостроения. Т. 1. С. 121–125.
- (22) *Кротов П.А.* Судостроительные программы Балтийского флота 1707, 1715 и 1717–1718 годов // Там же. Гл. 11. С. 121–125.
- (23) РГАДА. Ф. 9. Отд. 2. Д. 39. Л. 454; Ф. 198. Оп. 1. Д. 352. Л. 164–166; Материалы для истории русского флота (МИРФ). СПб., 1865. Ч. 2. С. 293–294.
- (24) Anderson, R.C. *Naval Wars in the Baltic during the Sailing-Ship Epoch 1522–1850*. London, 1910. p.185; Garde, H.G. *Den dansk-norske sømagts historie. 1700–1814*. København, 1852. S. 96; Tornquist, C.G. *Utkast till svenska flottans sjötåg*. Stockholm, 1788. D. 2. S. 93.
- (25) *Андерсон М.С.* Петр Великий. Ростов-на-Дону; М., 1997. С. 155.
- (26) Там же. С.157
- (27) Там же.
- (28) *Петрухинцев Н.Н.* «А самых больших кораблей нам строить трудно...» // Родина. 1996. № 7–8. С. 19.
- (29) *Кротов П.А.* Создание линейного флота на Балтике при Петре I. С. 326.
- (30) Донесения и другие бумаги английских послов, посланников и резидентов при русском дворе с 1711 г. по 1719 г. // Сб. РИО. СПб., 1888. Т. 61. С. 537.
- (31) Российский государственный архив Военно-Морского флота (РГАВМФ). Ф. 232 (Канцелярия вице-адмирала М.Х. Змаевича). Оп. 1. Д. 2. Л. 73; МИРФ. Ч. 2. С. 614, 615.
- (32) *Ден Д.* История Российского флота в царствование Петра Великого / Пер. с англ. яз. Е.Е. Путьгина / Вст. статья, научная редакция и уточнение перевода, примечания П.А. Кротова. СПб., 1999. С. 186, примечание 382.
- (33) *Кротов П.А.* 19 мая 1714 года. Загадка обретения Санкт-Петербургом официального статуса столицы России // Родина. 2012. № 7. С. 4–7.
- (34) РГАДА. Ф. 9. Отд. 2. Кн. 25. Л. 409, 412; МИРФ. СПб., 1865. Ч. 1. С. 619, 632, 633, 639; Походный журнал 1715 года. СПб., 1913. С. 17–25.
- (35) *Кротов П.А.* Петербургский порт при Петре I. С. 423–430.
- (36) РГАДА. Ф. 248. Оп. 10. Д. 537. Л. 325.
- (37) *Кротов П.А.* Российский флот на Балтике при Петре Великом. Дисс... д. и. н. СПб., 1999. С. 618–619.
- (38) *Милоков П.Н.* Государственное хозяйство России... С. 546.
- (39) *Андерсон М.С.* Петр Великий. С. 158.
- (40) Там же. С. 593, 601, 613.
- (41) Там же. С. 492–495, 497, 590–593, 602–605, 610–613.
- (42) Phillips, E.J. *The Founding of Russia's Navy. Peter the Great and the Azov Fleet. 1608-1714*. Westport & London, 1994. pp. VII–VIII.
- (43) *Кротов П.А.* Создание линейного флота на Балтике при Петре I // Исторические записки. М., 1988. Т. 116. С. 325, 330..

... истории. 1991. № 11. С. 210–211.  
 ...  
 ... Ф. 550 (Основное собрание  
 ... русском дворе Чарльза Витворга  
 ... СПб., 1884. Т. 39. С.  
 ... еские записки. М., 1988. Т. 116. С.  
 ... Судостроительные программы  
 ... о судостроения. Т. 1. С. 121–125.  
 ... 15 и 1717–1718 годов // Там же.  
 ... териалы для истории русского  
 ... 1–1850. London, 1910. p.185; Garde,  
 ... Tornquist, C.G. *Utkast till swenska*  
 ... // Родина. 1996. № 7–8. С. 19.  
 ... тов при русском дворе с 1711 г. по  
 ... Ф. 232 (Канцелярия вице-  
 ... р. с англ. яз. Е.Е. Путятина / Вст.  
 ... СПб., 1999. С. 186, примечание  
 ... фициального статуса столицы  
 ... 9, 632, 633, 639; Походный журнал  
 ... д. и. н. СПб., 1999. С. 618–619.

- (44) РГАДА. Ф. 198. Оп. 1. Д. 166. Л. 431–432, 433.
- (45) Там же.
- (46) Кротов П.А. Гангутская баталия 1714 года. СПб., 1996. С. 161.
- (47) Richmond H.W. *Statesmen and the Sea Power*. Oxford, 1947. P. 109.



図1 ピョートル時代のロシアとその周辺

〔典拠〕 田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史2』山川出版社, 1994年, 23頁を修正。

... Fleet. 1608-1714. Westport & London,  
 ... чические записки. М., 1988. Т. 116. С.

## 解 説

現在、パーヴェル・クロートフ氏はロシア連邦サンクト・ペテルブルク国立大学歴史学部教授である。1961年6月22日生まれ、教授は、レニングラード（現ペテルブルク）国立大学歴史学部で学んだ後、中央海軍博物館でガイドとして働いた経験をもつ。1985年からレニングラード国立教育大学歴史学部の講師となり、1987年11月には博士候補論文「18世紀第1・4半期におけるバルト海艦隊建設」で学位を取得した。1996年、ロシア海軍創設300周年記念メダルを授与された。同年、サンクト・ペテルブルク国立大学歴史学部「古代から20世紀までのロシア史講座」の講師となり、2002年に教授へと昇格している。その間の1999年12月、「ピョートル大帝治世下のバルト海におけるロシア海軍」で博士の学位を取得し、2000年12月には軍事歴史学アカデミーの会員に選出された。

クロートフ教授には以下のような著作がある。『1714年のハンウーの戦い』（サンクト・ペテルブルク、1996年）、『サンクト・ペテルブルクの創設』（サンクト・ペテルブルク、2006年）、『1702年のツァーリの道 サンクト・ペテルブルク創設へのプロローグ』（サンクト・ペテルブルク、2011年）、『ポルタワ近郊の戦い』（サンクト・ペテルブルク、2014年）、『1714年のハンウーの戦い—ロシア艦隊の栄光の始まり』（サンクト・ペテルブルク、2014年）である。また、イギリスに生まれ、ピョートルの艦隊に勤務し、その後、密告により解雇されたジョン・デンがロシア艦隊についてまとめた原文英文の翻訳に序文を書いた『ピョートル大帝治世のロシア艦隊の歴史』（サンクト・ペテルブルク、1999年）、啓蒙思想家で作家・翻訳家のA. A. ナールトフの手稿を刊行して序文を付した『ピョートル大帝についての物語』（サンクト・ペテルブルク、2001年）などを編集している。他にもピョートル時代を中心に18世紀ロシアについて多くの論文がある。

以上に見られるように、教授の関心は、ピョートル一世によって創設されたロシア艦隊に始まり、同大帝によるロシア帝国の建設過程、およびヨーロッパにおける列強としての地位の獲得に至る道程に注がれている。ここに訳出した論文は以上のような自身の研究の経歴を良く反映している。

なおこの論文の特徴は、ピョートル改革における海軍艦隊創設を詳細に検討し、ロシアの軍事大国への動きと合わせてその意味を考える点にある。そのために幾つもの論点を提示している。第1に、軍事の必要から工業が進展したこと。第2に、農奴制システムは軍事行動への利用のために安価な労働力を提供したという新たな見方を提示していること。これは農奴制がなぜ長期にわたって存続しえたのかというロシア史上の基本的な問題点とも関連する重要な論点を提供している。第3に、ピョートルは、ロシアが保有していた財政的・物質的・人的資源をよく考えた上で、その軍事改革の一環である海軍艦隊創設を行なったという点。第4に、以上



の点とも関連するが、ヨーロッパ諸国の支出の基本的な部分は軍事費であり、ロシアもその例外ではなかったということ。この点では、クローツ教授も近年の近世ヨーロッパ史における「財政＝軍事国家」論についての議論を念頭に入れているようにも見える。第5に、ピョートルの軍隊は常備軍と非常備軍（カザーク軍団および非ロシア人部隊）から成り立っているが、そのうちの常備軍に焦点を当てて検討しているという点である。第6に、ピョートルの最大の功績を海軍艦隊の創設に見ている点。そして第7に、ピョートルのバルト海での真の勝利を海上交易の漸次的増大であるとする点である。以上を通して、ピョートルのロシアはヨーロッパの列強の一つになったというのである。

以上の特徴をもつ論文は、明治大学国際交流基金事業の外国人有識者招聘で招いた2015年6月26日～7月5日、明治大学およびロシア史研究会で行なった同名の講義と報告のための原稿が基になっている。この講義と報告では多くの写真も利用していたが、翻訳に当たってはそれらをすべて省略した。なお明治大学に滞在した同期間、教授は「ピョートル大帝：その個性と行政についての観念」といういま一つ別の講義・報告を行なっている。そこでは、ピョートルの個性とその改革の意義を古今東西の皇帝たちとの比較に始まり、ピョートル改革の方向性を見極めようとする意欲的なものであった。

なお、近世ロシア軍事史研究については、要領よくまとめている田中良英論文がある（「近世ロシア軍事史研究の動向：18世紀を中心に」（『宮城教育大学紀要』47, 2012年, 49～69頁）。それはまた近世ロシアの軍隊・軍事史研究の現在を検討しながら、論点を整理している点で貴重である。とくに58頁以下の軍事史文献リストはこれから軍事史を勉強する者にとって大いに参考になるであろう。

（豊川浩一・明治大学文学部教授）

## Reforms to the Russian Army under the Reign of Peter the Great

P. A. KROTOV

This paper discusses the significance of the reforms implemented the Russian army under the reign of Peter the Great (1682-1725). This period in Russian history was marked by the success of their military strength, which was leverage to establish the Russian Empire. When Peter succeeded to the throne, Russia was economically underdeveloped, various measures had to be undertaken for the modernization of the country. In particular, a new policy was adopted to bring about reforms within the Russian army.

While the conservative feudal systems of personal proprietary rights and serfdom during this period have largely been described as backward, they were instrumental in bringing about the reforms in the Russian army. The personal proprietary rights proved to be useful for the development of the vast natural resources in Russia, while the serfdom was important for the securing of man power.

The reformed army was first put to the test during the Northern War against Sweden. However, Russia's European contemporaries attributed Russia's victory over its enemy to the success of the naval fleet instead of the army, and they considered the subsequent prosperity of St. Petersburg a result of the performance of the Russian navy. Furthermore, Russia planned and implemented a uniform foreign policy toward the European countries based on the success of the naval force. With this, Russia became one of the Great Powers of Europe.

**Keywords:** Peter the Great, Russian Army, Russian Navy, Russian Naval Fleet, the Northern War.

の点とも関連するが、ヨーロッパ諸国の支出の基本的な部分は軍事費であり、ロシアもその例外ではなかったということ。この点では、クローツフ教授も近年の近世ヨーロッパ史における「財政＝軍事国家」論についての議論を念頭に入れているようにも見える。第5に、ピョートルの軍隊は常備軍と非常備軍（カザーク軍団および非ロシア人部隊）から成り立っているが、そのうちの常備軍に焦点を当てて検討しているという点である。第6に、ピョートルの最大の功績を海軍艦隊の創設に見ている点。そして第7に、ピョートルのバルト海での真の勝利を海上交易の漸次的増大であるとする点である。以上を通して、ピョートルのロシアはヨーロッパの列強の一つになったというのである。

以上の特徴をもつ論文は、明治大学国際交流基金事業の外国人有識者招聘で招いた2015年6月26日～7月5日、明治大学およびロシア史研究会で行なった同名の講義と報告のための原稿が基になっている。この講義と報告では多くの写真も利用していたが、翻訳に当たってはそれらをすべて省略した。なお明治大学に滞在した同期間、教授は「ピョートル大帝：その個性と行政についての観念」といういま一つ別の講義・報告を行なっている。そこでは、ピョートルの個性とその改革の意義を古今東西の皇帝たちとの比較に始まり、ピョートル改革の方向性を見極めようとする意欲的なものであった。

なお、近世ロシア軍事史研究については、要領よくまとめている田中良英論文がある（「近世ロシア軍事史研究の動向：18世紀を中心に」〔『宮城教育大学紀要』47, 2012年, 49～69頁〕）。それはまた近世ロシアの軍隊・軍事史研究の現在を検討しながら、論点を整理している点で貴重である。とくに58頁以下の軍事史文献リストはこれから軍事史を勉強する者にとって大いに参考になるであろう。

（豊川浩一・明治大学文学部教授）

# SUNDAI SHIGAKU

(*Sundai Historical Review*)

• History • Archaeology • Geography

---

No. 161

September 2017

---

**Articles**

- Laborers Hired by Military during the Russo-Japanese War:  
With Special Reference to Rules Regulating  
Military Laborers and their Enthusiasm ..... FUJIOKA Yūki 1
- Two Movements of Supporting Refugees in the  
Ottoman Empire after the Crimean War:  
Analysis of Lists of Donations on Official Gazettes and  
Newspapers from 1860 to 1865 ..... NARUJI Sōta 23
- Reforms to the Russian Army under the  
Reign of Peter the Great ..... P. A. KROTOV 63
- Bifacial Reduction Theory and Its Application to  
Point Industry: A Critical Approach ..... FUJIYAMA Ryuzo 81
- The Energy Issues as Resource Problem in  
Contemporary Japan: Notes on  
Economic Geographical Perspectives ..... MATSUHASHI Koji 111
- Motive and Logic of the *Discourse Critics of  
Japanese Romantic School* by  
HASHIKAWA Bunzō ..... HIYAZAKI Takanori (1)

---

**SUNDAI HISTORICAL ASSOCIATION**  
of  
**MEIJI UNIVERSITY**